

## ニンフェアール第10回公演『東洋と西洋の絃』7/20(日)@5PM

### ～ギター-の佐藤紀雄さんと箏の木村麻耶さんを迎えて：インタビュー第3弾～

◎今回の公演のために新作を書いていただきました、作曲家の田中範康さん、エベルト・バスケスさん、水野みか子さんに新作について伺いました。(プログラム順)

♪田中さんに質問です。ギター作品、箏の作品は、何曲か書かれていると思いますが、過去にどんな組み合わせで書かれているのでしょうか？

箏の作品は、十三絃ソロ1曲、十三絃2、十七絃1によるトリオ3曲、能管、鼓、大鼓、2面の十三絃、十七絃1曲、本年3月、NYで初演した尺八、十三絃、チェロのトリオ作品です。ギター作品は、エレクトロニクスとギターによる作品、今回の作品、2曲のみです。(田中)

♪この組み合わせでの作曲はいかがでしたか？ 十三絃の箏にこだわっておられるということですが、その魅力は何でしょうか？

後にも先にも難しいの一言。2つの楽器とも繊細な表現が求められ、中でも音色、音量のバランスが難しく、どのようなアンサンブルをイメージしたらよいのか、本音を言うと迷い続け、未だに答えが出ていない。箏は近代にかけて十三絃以外の様々な種類が使われるようになったが、やはり、長い歴史の中、試行錯誤を重ねて完成された十三絃箏が、箏という楽器の原点だと思う。そして音色のつややかさと深みのある独特のソノリティ、さらに音の切れ味が最良に感じられるのが十三絃であり、これからもその魅力を引き出す試みを続けていきたいと考えている。それに加え、今回二十五絃を間近にみて、十三絃とはひと味もふた味も違う魅力を発見したことも事実。欲張りだが、二十五絃のソロ作品を書く意欲に駆り立てられている。(田中)

♪今回の作品の聴きどころは？ 現代音楽に馴染みのない皆さんにメッセージをお願いします。

作品の聴き所は？といわれても、それは聴衆の方達が当夜の作品に対してどのような印象をもたれるのか、それぞれの素直な感じ方を大切にしたいので、(先入観をもたれないよう)コメントを差し控えたいと思います。ただ、現代音楽というと、難解で特異な存在と思われる方が多いので、それについて一言申し上げます。極端な言い方になるかも知れませんが、今の時代に作られた作品は、それが調性であれ、無調であれ、全て現代曲(音楽)と言って差し支えないと思います。そして作品の好き嫌いは別にして、全ての作品には、それを書いた作曲家の主張があり、思いがあるわけです。ですので、現代音楽という単語に惑わされずに、歴史や文化の変遷の中で培われた今の時代の音の創造物として、当夜の作品も含め、今後は、現代作品を気楽に聴いていただければ幸いです。(田中)

♪バスケスさんに質問です。日本の箏を使っただけの作曲はいかがでしたか？ 今回、箏を使用したのは初めてでしょうか？ ギターと箏との関係についてどのように考えて作曲されましたか？

2011年に箏の為の作品、《Relatos》を2曲書いています。それらの作品は、滝田美智子氏に捧げた作品で、十三絃箏と、十七絃箏のための作品です。2011年に東京の白寿ホールで初演されました。今回の箏とギターの編成のところが、私は気に入っています。テクスチャーの混じり合いに対する様々な可能性や、楽器を打楽器のように使用するなどの可能性を感じました。(バスケス)

♪浮世絵に基づいた室内楽シリーズを書かれているとい

**うことですが、歌川広重の東海道五十三次に基づいているのですか？ きっかけは？ 既にどのようなものを書かれたのでしょうか？**

私は浮世絵に基づいた室内楽シリーズを制作しております。今回の新作のほかに、2作品既に完成しています。葛飾北斎による浮世絵からによる《神奈川沖浪裏》（フルート、クラリネット、打楽器、ピアノ、ヴァイオリン、チェロ）と、《日、龍、月》三部作（ヴァイオリンとピアノ）です。日本芸術、文化一般とともに、特に浮世絵を賞讃しています。（バスケス）

**♪メキシコから日本の観客の皆さんへのメッセージをお願いします。**

日本の観客の皆さんがコンサートで聴くもの全てが、広重の作品に感じる私の内面的感情です。私の心を揺さぶったものは、巨匠の木版画以上の何かです。今回の初演コンサートに伺えなくて本当に残念に思っています。再度、大好きな日本を訪問する機会があることを楽しみに願っております。（バスケス）

**♪水野さんのギターソロ新作についてですが、ギター作品は、今までに書かれたことはあるのでしょうか？ 今回の作品のアイデアである、フランスのペリー地方には、最近いかれたのでしょうか？**

ギター作品はこれまでに3作品書きました。いずれもエレクトロニクスやテープを伴っていましたが、独奏曲は今回が初体験ということになります。ペリー地方には3回ほど行ったことがあります、最後に行ってからすでに10年くらい経っています。ペリー地方の中心都市であるブルジュは、世界遺産の建物があり、美しい自然と農耕の街ですが、大変重要な電子音響音楽祭が最近まで開催されていた街でもあります。ペリー地方の印象にアイデアを得た作品として、以前、「描くパフォーマー

とフルートとインタラクティブシステム」のためのものを作曲しましたが、今回は、ペリー地方の視覚的風景と農業の伝統に想いを馳せながら作曲しました。（水野）

**♪今回の作品の聴きどころは？ 現代音楽に馴染みのない皆さんにメッセージをお願いします。**

ギターのソロですので、独奏者への負担は結構大きいと思います。演奏して下さる佐藤さんにとっても感謝しています。一声部のままピッチが跳躍しながら、音楽の水平的進行としての線を重層的に作って行く作品なのですが、途中に、明確に二声部として書いてある部分があって、その部分はちょっとメランコリックに聞こえるかもしれません。現代音楽は敬遠されることも多いですが、あまり難しく考えずに、気楽に聞いていただきたいです。特に、CD やラジオで聞くのではなく、実際に目の前で演奏家が演奏しているのを見てみると、案外、納得しながら聞けるように思います。（水野）

**♪ニンフェール代表の伊藤美由紀からメッセージ。**

今回の企画は、ギターの佐藤紀雄さんに私の愛知芸術文化センターから2011年委嘱作品である《プロメテウスの光》を演奏していただいたことから始まります。第1部がギターとエレクトロニクスで、初演から今日までに名古屋、メキシコ、中国、東京で演奏していただく機会があり、東京公演の際に箏の木村麻耶さんもコンサートで一緒に、今回の公演につながりました。音楽は、作曲家、演奏家、観客の皆さんとのつながりで存在していると思います。すばらしい演奏家との出会い、そしてたくさんの方々から聴いていただくことで、作曲家として音楽を生み出すエネルギーとなっていることと思います。そして、観客の皆さんの心に何かを残せるような音楽を、作曲家は書き続けて行きたいと願っています。

（聞き手：伊藤美由紀）